

詩時評

第19回

生きることの
一瞬一瞬が
人生の物語である

松本衆司

辻岡真紀子詩集『吹き抜けた時』（藩標）
を読む。表題作「吹き抜けた時」を引く。

押入れの奥に／空を忘れた鯉のぼりをみつ
けた／屋根より高くはないけれど／風の
やさしいバルコニーに掲げてやると／泳ぎ
だした／真鯉と緋鯉はおすおすと／子鯉は
面白そうに／あの頃と同じ三人家族／
昔 雛人形より鯉のぼりに憧れた／ある
がまま風に吹かれ／小さな龍になってみ
たかった／「行つてらっしゃい、どこま
でも」／解き放つと／鯉の家族は／尾ひれ
を尾翼のようにくねらせて／たちまち／五月
晴れの空に飛び立っていった／ボールの
先で／残った風車がカラカラとはしゃいで
いる／誰もいなくなった場所で回り続ける

意味を／風に問いながら／吹き寄せる風
が／飛べなかつた空の匂いを運んできた

詩集に収められたいずれの詩を読んでも心
が動く。生きることの一瞬一瞬が人生の尊い
物語になることを、この詩人は教えてくれる。

川鍋さく詩集『湖畔のリリー』（人間社草
原詩社）を読む。「the white afternoon」を
引く。

窓が少し／開いている／／ひんやり乾いた
外気が／露な二の腕に触れる／／散らかっ
た部屋／ベッドの上／繕れたシーツの柔ら
かくふやけた匂い／秋の終わり／／窓のす
ぐ向こうは／隣のアパートのくすんだ外壁
／／冷たい素肌に／あなたの右手／瞬間の
温もり／アパートの下の通りで／プラタナ
スの葉が／一枚／微かな音を立てて／枝か
らちぎれ落ちる／／キスより先に／「ホッ
クを外して」／／キッチンで蛇口にぶら下
がる水玉／膨らみながら／微々と震える

さりげないが無理のない情景描写と奥行き
を感じさせるメタファーに、この若き詩人の
可能性を見る。

中島悦子詩集『暗号という』（思潮社）を

読む。昨年、出版された詩集だが、取り上げ
る。「焦点」を引く。

廃屋の洋品店／ひび割れた硝子戸の奥では
／マネキンがくすんだ制服を着ている／つ
まり／生きている人間は／どこでも制服を
着せられて／マネキンになっているという
ことか／しかたなく嘘をついて／／マネキ
ンの表情を見る／どれも明るいふりがすき
／心がないのに希望だけはあのように／作
られている／全く目が合わない／その焦点
のあわない夢を／人間が見せられているよ
うな気がする／／いつか人間がいなくなっ
たあとの／マネキン工場では／もはや着せ
る服がなくなり／裸のマネキンが自動で作
り続けられるだろう／あられもないポーズ
で／おろかで巨大なばかりごとの代わり
に／ばらばらにされても／喜びをかくさな
い

人間の消えた世界で、ただ人間の「焦点の
あわない夢」だけが残され、時間だけが過ぎ
ていく。これが現実であった、と詩人は提示
する。故に世界はかくも寂しい。

根津真介詩集『虚と真』（土曜美術社）四
年間て十四冊目の詩集となる。量産だが、詩
がますます面白い。「残滓」を引く。

「Z」の後はない／「ん」の後もない／引き返す秒針がない／引つぱる紐も／たぐる綱も／梢の木守も／押すボタンもない／切れたホックを縫う針がない／古い鍵盤がある／試しに弾いてみたが／ポロンと聞の抜けた音を出して転がった／音階が外れている／灰汁が残っている／使い廻しの嫌味が少し／使い捨ての歯ブラシが一本／人間という己の滓が残っている／歪な曲がり具合の痛い「卑」の膝も

集中のいずれの詩も実感であり、哀感である。愛おしいのちの諸行がそのまま埋め込まれているような詩集である。

『カッペン 詩村映二詩文 季村敏夫編』（みずのわ出版）を読む。まず、詩村映二の詩「月蝕」を引く。

風は逃げて行った 動かぬ霧の中に港がある 静粛が一艘の船を繋いでゐる マストの尖のランプ（カンテラの灯はよるめきながら睡る）水夫のゐない海の怠惰な肌 景色を横切るものがないので町の女らは佻しがる そして一羽の鷗は死んでやらうと考えてゐた。

季村敏夫の「生きる姿——あとがきにかえて」の一節を引く。

愛することの過剰、それゆえの憎み、しかし愛されているのだ、詩村映二を読みつづけ、そうおもった。そうおもえたとき、生涯という時間がある形となつてみてきた。思い出の帰還を体感できたとき、ステイホーム、わたくしごと（私的Privateとは欠如公的なものが奪われていること）の外出、移動の自由は制限された。／雲去る、また来たる、詩村映二がことばに夢見たのは、大正末年から昭和初年の社会の欲望を浴びながらの帰還と出発だった。その生涯におもいを巡らすと、逃れられない現実の苦しみ、かなしみを抱いたまま、彼岸のなにか花々の気配に導かれていたことが伝わり、肅然とした。生まれ死ぬ、また生まれ死ぬ、片隅の詩人とともに過ごした時間、わたしには映画であった。（略）声と身体の分離する一九二〇年代の無声映画にこれほど惹かれるとは、おもってもいなかった。

昭和初年代の神戸、銀幕のむこうから流れてくる浪漫な世界を受け止める抒情詩人の詩文を発掘し、現代に甦らせる。その思いと詩情が十二分に伝わる一冊である。

「アピラ」第二号を読む。後藤光治による充実した個人詩誌である。「金の三日月」を引く。

黴臭い／納戸の隙間の襪樓布に／三毛猫が五匹の子猫を産んだ／節穴から覗くと／手足を突つ張り／裸で蠢く子猫を／月光菩薩のようなざらつく舌で／丹念に舐めていた／猫が離れたその隙に／母は 子猫を取り上げて／新聞紙にくるむと 僕に手渡した／捨てておいで 眼が開いたら可哀そうだろ／抗いたいが 拒否できぬ／仕方のないことなのだ／（貧しい時代だった）／新聞紙を爪で引つ掻く／か細い音を聞きながら／少年は 堤防へと一直線に駆けてゆく／そして一兵卒の律儀さで／包みを海に放るのだ／／さて／銀河の映える海を漂い／やがて 夜光虫の蛍光の渦を引き／没するまで見届けたのは／少年ではなく／やさしく微笑んだ／女神だ／／母猫は／痛々しくも啼き啼き／子ども捜して／月夜のお路を彷徨った／啼き果てて 見上げた空に／かかっていたのは／金の三日月／／其処 此処と／青く光つた夜だった

この少年の切実な心を回顧して、「（貧しい時代だった）」と言う。では、何が貧しかったのか。今はどうだろう。現代の悲しく貧し

い現実の心が浮かび上がる。

「コールサック」第一〇二号を読む。三百頁を超える季刊の文芸誌なので、拾い読みになるのだが、いつも思う、「文学」はうるわしい、と。そして、そのうるわしさが誤謬であるか、否か、文学者にはそれが問われているはずだ、と。浅山泰美「空地」を引く。

遠い夏の果てに立つ／無花果の木の陰に／
小さな子供が隠れている／まだ／その子の
母は見つからない／空のどこかで／雷鳴が
鳴っている／その子はいつまでも裸足のま
ま／とほくに暮れ／夏の終わりの湿った風
に吹かれ／蟬の声を聴くばかり／／そうす
るうちにも／静かに／無花果は熟れる／ま
だ見ぬ母の乳房のように／無花果は熟れ／
乳に似た白い果汁をしたたらず／もう／子
供は知っている／暗い寝室の鏡の中で／人
知れず／母がぬぐう涙のことを／／無花果
の木の下の 誰も知らない／子供の哀しみ
が埋まっている／母は見つかるだろうか／
いつか どこかで／もう 泣いてもいい、
と／曇天を湿った風とともに／蟬の声がわ
たつてゆき／やがて／鈍い光の矢が 数本
／空の高みから／この空地におりてくる

この詩が見事なのは、誰もが切実に願ひ、

どこかに空白感を感じながら生きていかねば
ならない母子憧憬の切なさが、夏の空地と無
花果の木によってさり気なく形作られている
ことだ。

「モデラート」を読む。記念の第五十号であ
る。編集発行人岡崎葉の二十六年の歩みは、
限りなく尊い。掲載十三人の詩人の優れた作
品の中から草野信子の「どこへ」を引く。

旅を思うと／きまつて ころろに浮かぶこ
とばがあります、と／古くからの友人が
言う／／〈旅は どこへ、ではなく だれ
と、で始まる物語／わたしの詩の一行／
／愛のはじまりを書いた詩は／廃刊された
詩誌の頁に かつて一度 編まれたが／詩
集には 取めなかつた ひそやかなもの
ひそかなもの／／原稿用紙にインクで書
いていた 遠い日の／紙も文字も 月日の
なかにまぎれ／わたしにも／たつた一行だ
けが 残つて／／〈旅は どこへ、ではな
く だれと、で始まる物語／詩のタイト
ルさえ 思い出せない／／だれと、なのか
が／すぐにわかると／／あのとき／生は
どこへ、で始まる物語／長い年月の旅にな
つたのだつた

記念号に相応しい詩だ。さりげない「わた

し」の思いの詩だが、そこに、長い年月が凝
縮されている。

「詩的现代」第三十三号を読む。西村博美の
「日高てるのいた春」を引く。

シャクティを囲む。まるくなつて、さあ、
この線より内に入つてはいけませんって、
てるさんが言う。ほおつと溜息をついてい
る男や見惚れてる女や。やまとたかだし・
どんご・三反田・日高てるさん方アトリエ。
へむかし、ほくはこの町で酒をおぼえた。
たつた百日ばかり住んだ字(あざ) 築山、
社員寮の踏み切りの向こう、赤提灯のねえ
さん。銭湯の帰りは、アイスクリームの後
の居酒屋。高田川の川沿いに、ほつてり咲
いていたボタンザクラの真下の。シャク
ティは床を蹴る。人の垣の環の円周が崩れ
る。(パチンコの玉は、いつもチンジャラ
と出るごとくなくて、また負けたよと、君は
情けなくいうよねと、ヒノさんは言うたけ
れど。はたちのころのむかしさ。速くでカ
ミナリがなつていたなあ。二、三百円すつ
て、とほとほと戻る道に。シャクティが
蔵に駆けいる。はみだして入れなくて、格
子の隙間から覗くと、黒衣もう肌脱ぎにな
りつつシャクティ、宙吊りにぶらりとゆれ
て。蔵の上にお月さまのおのほりだい。蔵

んなかから、シャクテイ現れ。闇にと竹藪に消え。(ほくの立つている河の堤の足もとの、暗くかなしくサクラ筏の行方よ) シャクテイの指の先が光る。ふたかみも・かつらぎも・こんごうも・のみのすくねも・たいまのけはやも・しゃくてもいも・しゃくしゃく・しゃくちようくうも・あおがきのこもれるやまも。(俯いてクツシタを洗っていたら、急に家に帰りたくなつてね。駅前の日通から布団袋を家に送つたよ。大和くんなか、ヒラハタあたり、モモのハナ咲いてた。) シャクテイが消える。人垣をすり抜けて消ゆる。てるさんもなくなくなる。ふたかみのふたこぶの鞍のあたりへ、てるさんもほんとうに、消えていなくなる。

(日高てる・一九二〇～二〇二〇)

黒衣の現代詩人日高てると舞踏家シャクテイのコラボによつて醸し出された独特の時空間が甦る。原初を生きる人間のぎりぎりの躍動と祈りがそこには込められていた。高田川の堤の桜、若かった西村博美の心が重層する見事なレクイエムだ。

甲田四郎編集発行による「いのちの籠」第一四十五号を読む。今号も五十人を超える詩人が詩やエッセイを寄せている。青山晴江の「燕飛ぶ空」を引く。

息をひそめている／街は不機嫌に黙り込んでいる／漠然とした不安があたりを包み／乗客の姿の見えない電車が／遠く鉄橋をガラガラと渡っていく／九年前降り注いだのは 放射能／いま散らばり増殖しているのは／新型コロナウイルス／どこか似ている／見えない、匂わない、微小／隠蔽される、分断される／差別と貧困を生む／困難なところにいる人に／なかなか届かないこの国の政策……／裂け目の入った日常に／疲れた心で河の堤を行けば／すでに季節は移り 新緑の空を／鋭い直線で高く低く 飛ぶ影がある／燕だ／農家の軒下の巣から／風を切るようにして飛んでいく／燕よ／この春／その翼に下に広がるのは／人間たちの／コロナ禍の街です

新型コロナウイルス感染症の脅威はまだまだ収まることを知らない。放射能の脅威による暮らしの破壊もいまだ解決しない。世界は人間によつてもたらされる災厄に四苦八苦している。詩人の眼はそれを的確に描く。

二〇一九年十二月四日に、八十九年の生涯を閉じられた原和子さんを、詩を通してお慰めしたい。「鶴鶴」第十四号に江口節による追悼記事が掲載されている。その文章を辿る。

五十代に朝日カルチャーセンターに通われた後、長く西宮の「灌木」に所属。以後、「叢生」で二〇〇二年から一五年の終刊まで。そして、この「鶴鶴」に五号から参加された。四篇の詩が掲載されている。いずれの詩も佳作だが、八号に掲載された「木橋」を原文のまま再掲する。

だれが消したんだろう

揺れる木橋

肩寄せあつた

川に向こうの 集落

あのときの少女

自転車の 少年

はっ、としてすれ違つて

走り去つたまんま

だれが 消したんだろう

生きていく限り、誰にだって消したい過去がある。思い出す度、辛苦の思いが心に滲み出す、そんな消したい過去がある。その一方で、ずっとそこに揺蕩っていたい思い出がある。忘れられない風景やシーンがある。原さんは「だれが 消したんだろう」と、その人々の心に諭すように語り掛ける。それはあなた自身なのよ、と。